エッセイ

K/H(ノーハウ)の強さ

SCE・Net　山本　彊

E-12

発行日
2008.2.22

ノーハウは理屈ではない。現場を良く知っていれば生まれるものだ。これが無くてはモノは出来ない。一昔前の話、ＬＰレコードのプレス金型メッキエ場でメッキ液にバクテリアがわく、すると全てが駄目になる。メッキ液の総入れ替え、大掃除で一日操業もストップ。大損害！

何とかならないか？　水で苦労をしている他杜の友人に相談すると、彼が言う「メッキ液の循環ラインの継ぎ手に段差がある。そこに液が淀んで渦が出来、ここにバクテリアがわく」　そこを内面つるつるに仕上げたら、問題解決。これがノーハウだ。技術は理屈の遊びではない。大切なのは実現性と収益性が伴うかどうかだ。

水晶時計は、それまでの機械式を追っ払ったが、此の原理の「ピエゾ現象」は１８８３年にピエール・キューリーが発見している。しかし百年後まで実用化されなかった。液晶パネルしかり、発見は百年くらい前、用途を思いついたのはＲＣＡ（アメリカ)、更に商品化して儲けたのは日本の電卓と時計のメーカーだった。故に技術が成功するには、(1)何を作るか　(2)どの様に作るか　(3)いかに売るか　の３段階が全て成功しなくてはならない。別の言い方をすれば、儲けるには、(1)ノーハウの固まりであって　(2)安くでき　(3)それが無くては品物が出来ない。そんな商品を作ることだ！！

京セラのセラミックパッケイジ、村田製作所のセラミックフィルター、日本高度紙の電解コンデンサー用和紙など他社の追従を許さない。

携帯電話の部品類(電池、水晶共振子、マイクロフォン、サウンダー、受信機、チップマウンターロボット　Ｅｔｃ.)は無人化で高能率のノーハウの固まりの工場で生産される。

面白いことだが、作っているモノはハイテク製品といわれるが、これらを可能にしている技術は、皆ハイテクではない事だ。ハイテクという言葉に、惑わされず足下の技術をしっかり固めることこそ、ハイテク時代に生き残る道です。

以上。